



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	農業経済の公務員試験
Author(s)	加藤, 俊次郎
Citation	季刊農業経営研究, 4, 10-10
Issue Date	1958-05-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/36276
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_10.pdf



ず、したがって経済力集中もその結果としてのものではないといわねばならないことも明らかだ。いいかえれば個々の農協は組織体としても、また企業経営体としてもけつして自主的な強力なものではなく、それ故に科学的究明の対象としてはすこぶるあいまいで、ひよわいものだといわねばならない。それにもかかわらず、最近大島清教授がいうように、「農協は、商品生産者および交換者としての資本と農民が経済関係をとりむすぶ市場を代表する、あるいは商品市場、金融市場そのもの」となっているところに問題があると思われる。すなわち、日本において特殊的ななぜこのような関係が成立するに至り、また成立しつづけているのかが究明されねばならない。そしてこのことをあきらかにしなければ日本の農協論は全きものではありえないと思われる。(13.4.1958)

(北海道大学助教授)

農業経済の 公務員試験

加藤 俊次郎

ことしの国家公務員の上級試験(旧6級職試験、大学卒業者を対象とするもの)は、例年よりいくぶん時期を繰りあげ、5月下旬に受付開始、7月下旬に第一次試験(教養試験と専門試験)を行う予定と聞いている。この試験には、毎年2万3、4千人の応募者があり、約1割が合格する。実際には諸官庁に採

用になるのはそのうちの一部にすぎないが、この試験に合格していると民間企業を志望する場合にも有利な条件となるので、本能寺を目ざしながら試験を受けるものも案外に多いという。これをけん制する意味もあつて、2、3年前から500円の受験料を取るようになったけれども、応募者数は一向に減らない。

農業関係で受験申込の多いのは、農学、農芸化学、農業工学などで、それに次いで多いのが農業経済である。農業経済の昨年の試験申込者は386名、うち合格者は22名であつた。

試験は教養試験と専門試験に分れているが、農業経済の専門試験の出題数は例年90題と決まっている。この90題のうち、昨年の正答数は最高が69題、最低が13題、平均38.5題であつたから、百点満点に換算すると平均点は43点ということになる。

90題の問題は、出題形式がすべて択一式であつて、各問題はそれぞれ4個の擬答と1個の正答からできており、5つの間の中から1つの正しい答を射当てるといふものである。この出題形式は、思考過程や表現力をみる上には不適当であるけれども、短時間に多数の問題を投げ与えて知識の幅を的確に測定できる点、また大量の受験者を短期間にさばき得る点において、在来の論文式の出題形式にまさっている。(もつとも両3年前から公務員試験にも択一式に加えて論文若干が併用されることになった)。とくに択一式のすぐれているのは、採点が電気採点

機で行われ、採点者の主観がまつたく介入しないことである。電気採点機は、答案用紙が電気の不良導体、正答個所を塗りつづす鉛筆の黒鉛が電気の良導体であることを応用したもので、答案をこの機械にかけると、正答数は電流の量に置きかえられて迅速正確に集計される。

択一式の問題を解くには、試験技術のようなものはいくつかあるが、何といつても大切なのは注意力である。数年前、経営集約度に関する問題の擬答として、『交通手段が発達すると都市近接地の農業は集約化し都市遠隔地の農業は粗放化する』というのが出されたことがあるが、これを正答に選んだ受験者がかなり多数あつた。よく考えれば何でもないことなのだが、うつかり文章の調子に引きずられたわけであらう。

筆者は、人事院の専門試験委員として、かれこれ10年近く農業経済の問題作成にたずさわってきたが、択一式の試験問題は、もつともらしい4個の擬答をそろえることが仲々容易でなく、受験者とはまた異つた悩みを毎年のように味わっている。

(農材省図書館長)